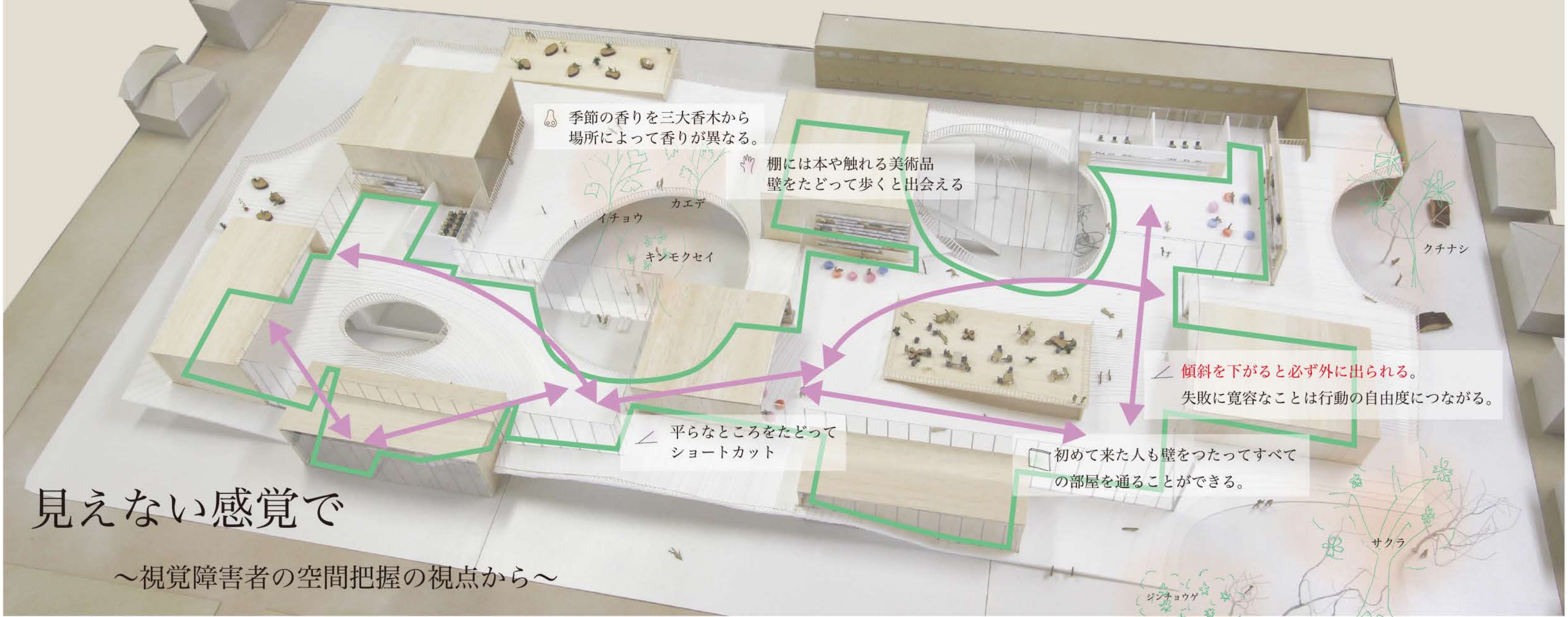


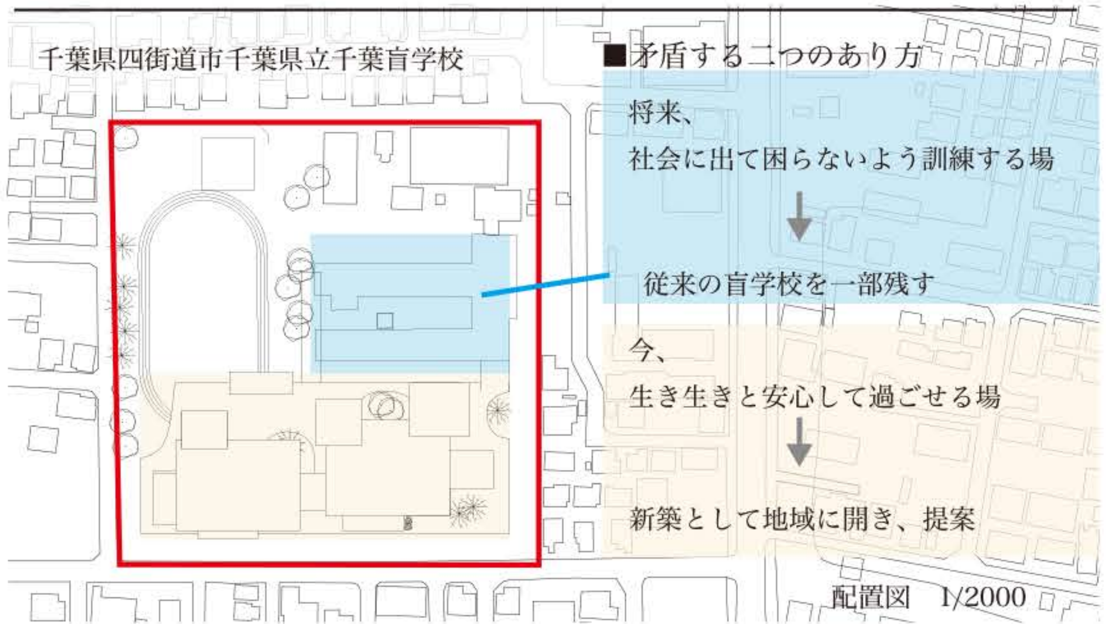
見えない感覚で

～視覚障害者の空間把握の視点から～

設計趣旨　見えない人の世界から建築をとらえ直す

見えない人からみた建築や世界はどうなっているのか。また、見えない人からみたら建築やその構成要素の役割は変わるのではないか。違うバランスで世界をとらえる人の立場で建築を考える。

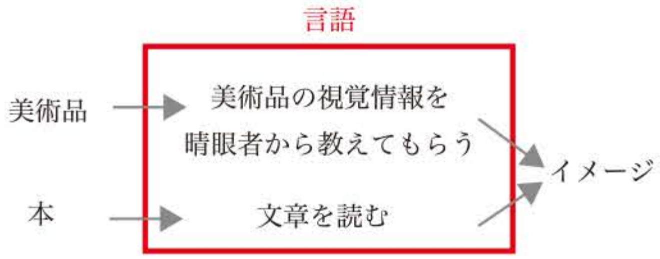
敷地　盲学校が建築に求めるあり方



配置図　1/2000

調査　視覚障害者の空間把握

■視覚情報を言語から得る

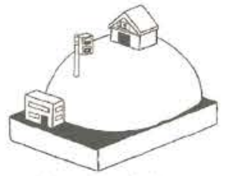


■とらえる「部分」のスケールの違い

見える人

全体→部分

見えない人



部分→全体

傾斜の変化によってその先の地形を推測できる

部分　全体

プログラム

見えない人にとって、
美術品を見ることと
本を読むことは似ている

①言語化された視覚情報を
イメージする

②一つのものを
時間をかけて触る

ビルディングタイプの統合

滞在型図書館が順路を持って
連続する形式をとる

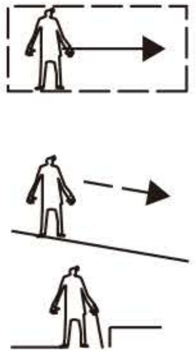
分析

■建築の構成要素が持つ役割を再定義する

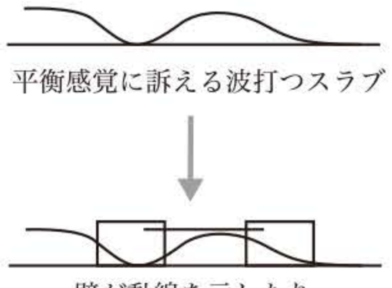
1 壁　・自分がいる場所を示す
・動線を示す

2 傾斜　・自分がいる場所を示す
・方向を示す

3 段差　・空間の端をつくる



ダイヤグラム

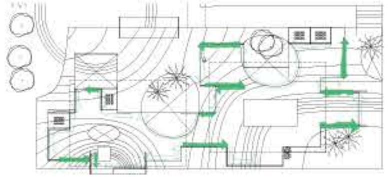


壁が動線を示したり
空間を分けたりする。

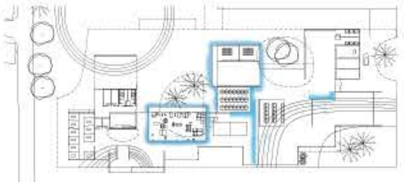
平面図

建築の構成要素の仕掛け

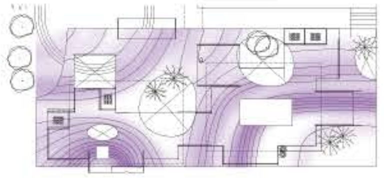
壁が動線になる
初めて来た人も壁をつたって
すべての部屋を通ることができる。

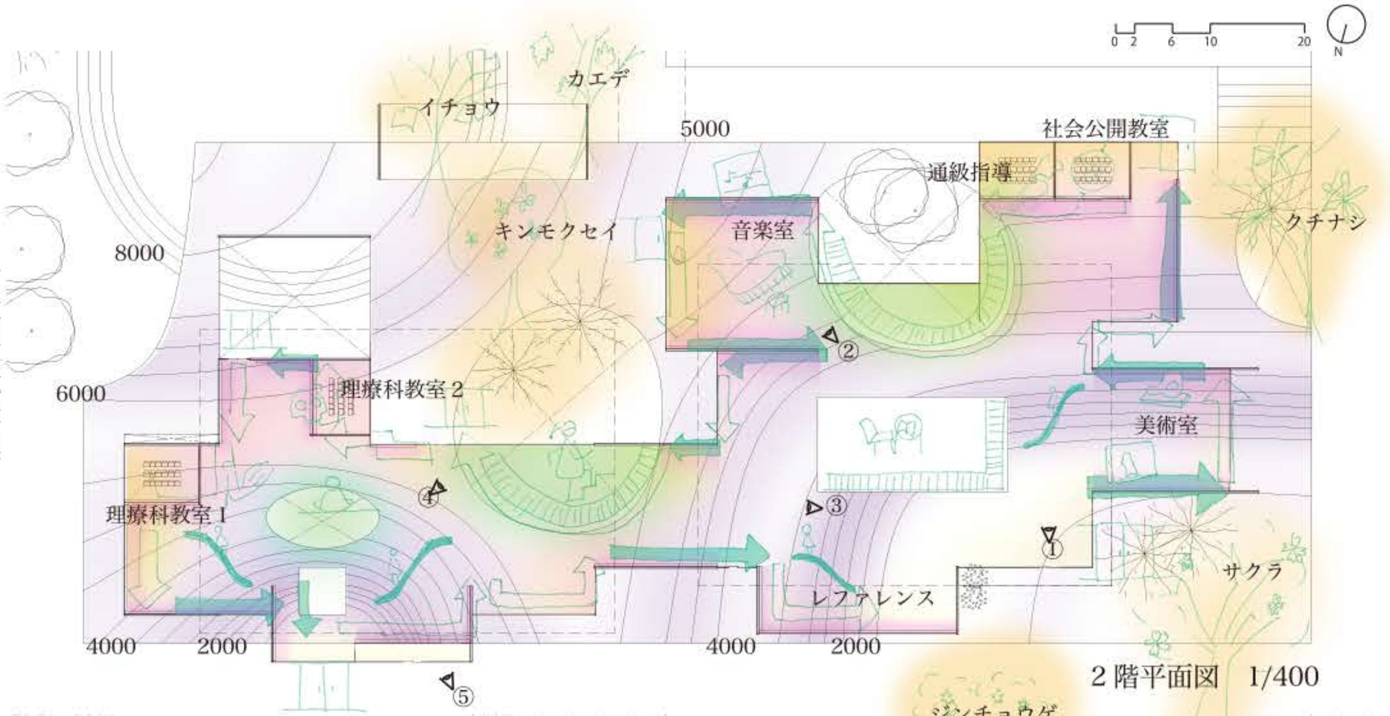


段差が空間の端を示す
ワンフロアの空間も段差で
ゾーンニングを理解できる。

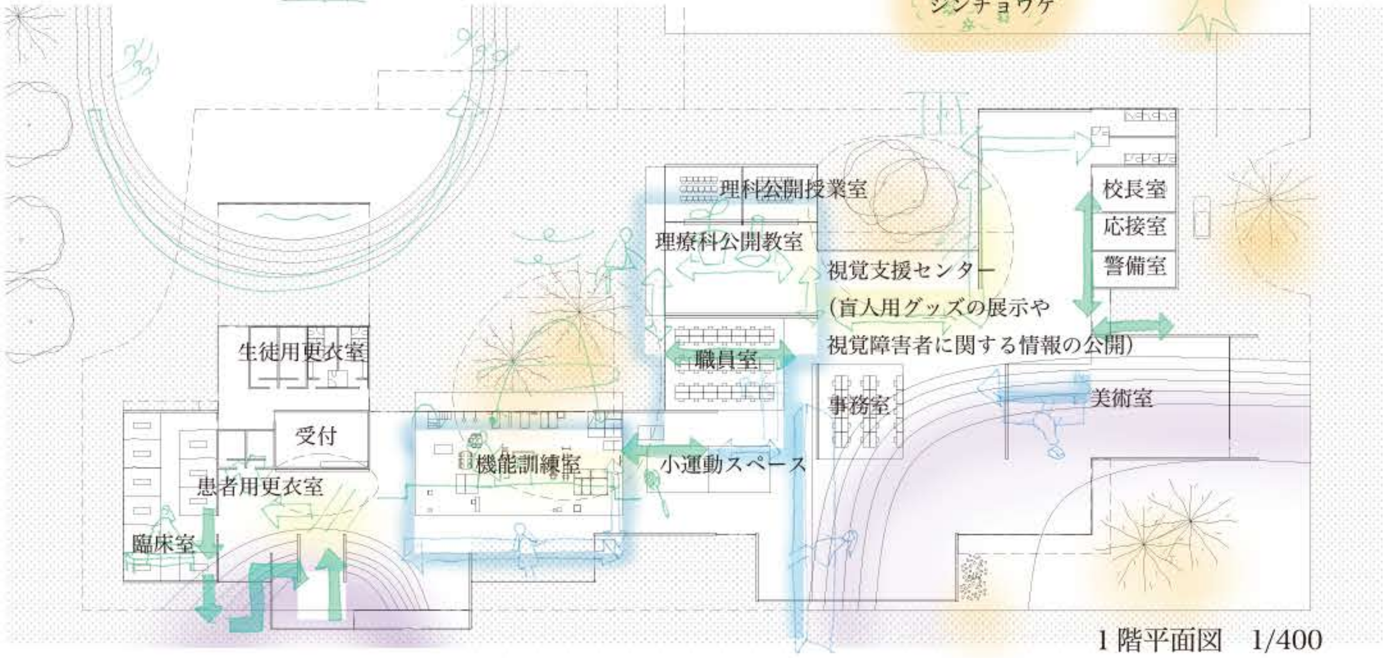


傾斜が空間に方向を与える
傾斜を下がると必ず外に出られる。
失敗に寛容なことは
行動の自由度につながる。





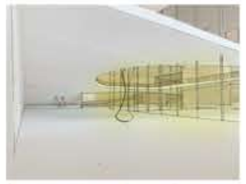
2 階平面図　1/400



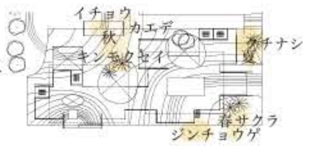
1 階平面図　1/400

周辺の環境やアクティビティ

光



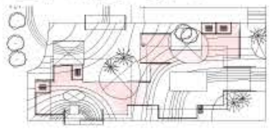
匂い
三大香木が場所に
性格を与える。



音

空気の流れ
空気の流れの変化から
自分の位置をつかむ

温度
ガラス面から光が差し込み
傾斜の上下で温度が変わる

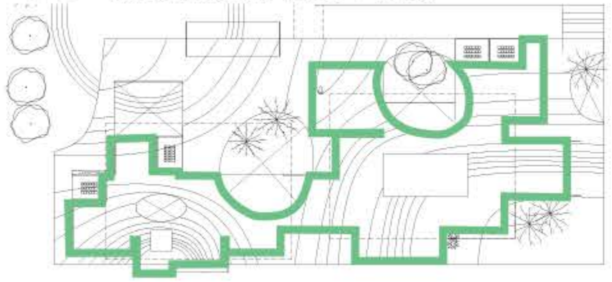


触る
盲学校の壁周辺は動線になるため壁際に
物を置けないが手すりのような役割もする本棚が
物を吸収し危険なく本や美術品と出会える。

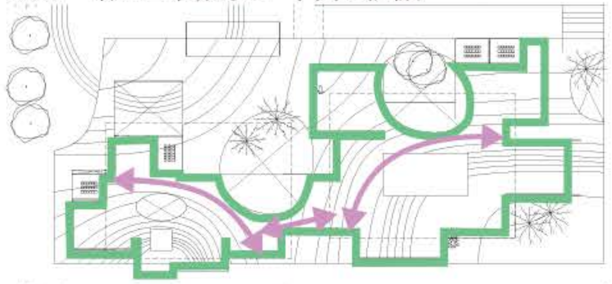
歩行のレベル別動線の選択性

歩行者がその空間に慣れているかどうかや歩行訓練のレベルに応じて動線を選択できる。

レベル１　線型空間把握（壁をつたう）

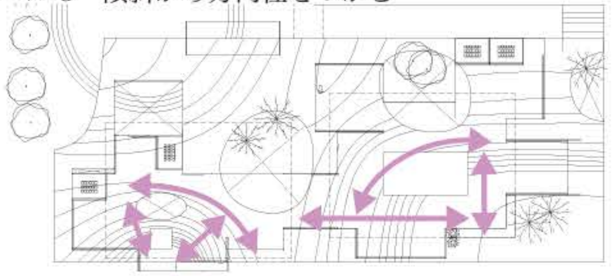


レベル２　線型空間把握＋平面の認識



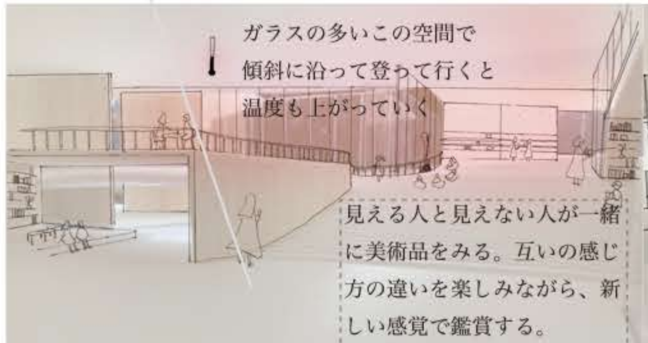
（傾斜のないところを進み、ショートカットする）

レベル３　傾斜から方向性をつかむ



（等高線に対して垂直に進んだり平行に進んだりする）

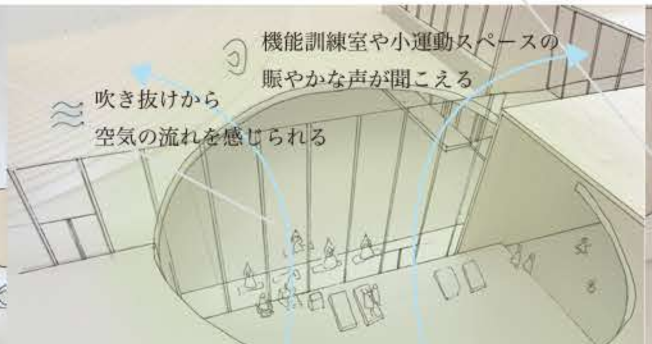
緑の線上を歩いた時の見えない人の空間体験



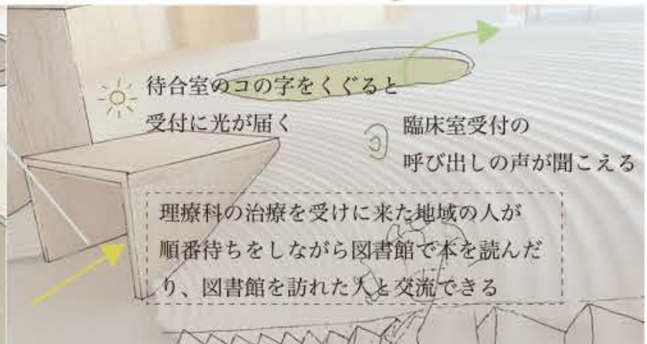
①エントランスより

②音楽室をみる

③レファレンスの上部から



④機能訓練室



⑤理療科側エントランス、待合室